

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月14日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02031

研究課題名(和文) 證人社と證人書院の間 明清期寧紹地区に見る思想史の転変

研究課題名(英文) From Zhengrenshe to Zhengrenshuyuan-The Transition of Thought in Ningshao area at Mingqing era-

研究代表者

早坂 俊廣 (HAYASAKA, TOSHIHIRO)

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：10259963

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：明末の儒学者・劉宗周の思想活動がどのようなものであったか、その思想はどのように継承されたのかを、明末の紹興・餘姚地域に即して解明した。1) 劉宗周出現以前の紹興地域の思潮を切り取る論文を公表、2) 劉宗周の著『人譜』を晩明思想のなかに位置づけた中国語論文を翻訳、3) 劉宗周と同時代人の論争を詳細に分析する論文を国際学会で発表するとともに、その日本語版を学術誌で公表した。また、現地調査も積極的に行い、中国の研究者と交流を重ねた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一人の思想家が彼の生きた地域や時代のなかで、どのように思想活動を展開したのか。そして、その思想が後の時代において、地域のなかでどのように継承されたのか。このような、文字通りの「地に足の着いた」視点で研究することにより、個別の思想だけでなく、その時代や地域の特色を具体的に解明することができる。本研究はそのことを実践することにより、明清時代の寧紹地域の思想的特性を明らかにした。学術的意義については言うまでもないが、古来、日本と縁の深かった同地域の知られざる歴史が明らかになった点には、社会的意義も存するものと思われる。

研究成果の概要(英文)：I studied what kind of philosophical activity of Liu-Zongzhou, a Ruxue scholar of the late Ming period, and how his thought was inherited, according to Shaoxing-Yuyao area of late Ming period.

1) I published a thesis to analyze the thought of Shaoxing area before the arrival of Liu-Zongzhou.
2) I translated a Chinese paper that placed the main works of Liu-Zongzhou, "RENPU", in the late Ming period.
3) At the same time as I presented at an international conference an article analyzing in detail how Liu-Zongzhou disputed his rivals, I published the Japanese version in an academic journal.
4) I actively conducted field surveys and had exchanges with Chinese researchers.

研究分野：中国哲学

キーワード：劉宗周 明清 寧紹地区 證人社 證人書院 姚江書院

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

明末期を代表する思想家である劉宗周に対する研究は、中国語圏でも日本語圏でも一定数存在するものの、その思想構造や思想継承の様態について不明な点が多く存在していた。

2. 研究の目的

劉宗周を語るうえでこれまで特権的な位置を占めていた黄宗羲の視点から自由になり、より地に足をついた形で劉宗周の思想を論じることを目指した。

3. 研究の方法

研究代表者がこれまで継続して行ってきた「現地調査と文献読解の融合」という視点を中心に据えつつ、議論の推移や思想継承の様態から思想家の本領を解明する方法を採った。

4. 研究成果

劉宗周の思想が、黄宗羲・全祖望へとつながる思想史の通路（いわゆる「證人書院」への道）だけでなく、姚江書院へとつながっていく道もあることを解明した。この点は、当初予想していなかった思想史の筋道の発見であり、今後も解明を続けていきたいと考えている。

また、姚江書院の起点となった義学を中心に活動した史孝復という思想家と劉宗周の論争を緻密に分析することを通して、劉宗周思想の実相を解明した。この論争は古来有名なものではあったが、論争相手がどういう背景をもった人物であるかを理解しないまま表面的な分析が行われていただけにとどまっていた。本研究により、劉宗周思想の特性だけでなく、それが後にどのような形で伝播していくのかという点まで検討することができた。

なお、研究代表者が行った現地調査には、中国の若手研究者が同行し、その研究方法は中国の次世代に刺激を与えた。劉宗周思想に関し、国際学会において中国語で論考を発表したことも、海外への研究成果の発信といえる。

以下、年度を追って研究成果を具体的に説明していく。

初年度であった2015年度は、張天傑『シュウ山学派与明清學術轉型』（中国社会科学出版社）や呂妙芬『陽明學士社群』（新星出版社）といった先行研究を分析するところから研究を開始した。特に前者は、申請後に刊行された、本研究と密接に関係する業績であり、この業績とどのような差異化をはかるかを慎重に検討した。また、何俊『西学与晚明思想的裂變』（上海人民出版社）の、劉宗周に関する章について、全訳を完成させた。同書については、他の研究者と連携して全体の翻訳を進めており、その監修にも従事した。以上の研究により、晚明思想に対する理解を深化させることができた。

研究成果の発表としては、2015年8月に東洋大学で開催された国際シンポジウム「王畿の良知心学と明末の講学活動」において「語らない周夢秀を語る 王畿とジョウ県の周氏」と題する研究報告を行うとともに、それを拡充発展させた同名の論文を、後日出版が予定されている論集に投稿した（〔図書〕に掲載）。周夢秀は周汝登に大きな影響を与えた彼の親族であり、この論文によって、劉宗周出現直前の晚明紹興の思潮を描写することができた。

2015年度は、本務との兼ね合いもあって、中国で現地調査を行うことができなかったが、上記の国際シンポジウムに中国から3名の研究者が参加したので、彼等と研究情報の交換を大に行うことができた。本課題開始直前に杭州師範大学から招聘されて講演を行ったが、その際にも学術情報を多く得ることができたので、現地調査の実施に等しい成果を手にすることができた。

2年目の2016年度は、牟宗三『從陸象山到劉シュウ山』といった古典的な研究書や陳永革『儒学名臣 劉宗周伝』（浙江人民出版社）といった伝記研究などを分析するとともに、劉宗周の思想を受け継ぐ門人たちの資料の整理にとりかかった。特に、姚江書院に関する資料の整理は、本研究の進展を促すものであった。研究計画書に2年目の課題として記していた惲日初については、長らく逸書とされていた彼の『劉子節要』が発見・刊行され、そこには惲日初の文集も収められた（中央研究院中国文哲研究所刊）。惲日初に関する資料を整理することを当初の目標としていたが、それが不要になったことは嬉しい誤算であった。なお、惲日初の事績を調べるために、江西省無錫・武進で現地調査を行った。具体的には、惲日初もそこで学を講じたことのある無錫の東林書院、彼の子である惲南田の墓（彼も一緒に葬られていることを現地で確認）を訪れ、写真撮影等を行った。また、調査の前後に資料収集を行うこともできた。実際の研究成果としては、「書評 三浦秀一著『科学と性理学 明代思想史新探』」（『集刊東洋学』第116号に掲載。単著）と「王畿「慈湖精舍會語」訳注」（『白山中国学』通巻23号。共著）を公表することができた。前者は書評であるが、この執筆は明代思想史の整理という点で今後の本研究の推進に大いに資するものがあつた。後者は共著であるが、下訳および完成稿の作成を一人で担当した。「慈湖精舍會語」は楊簡の「不起意」説が中心論題であつたため、その部分に限って言えば、劉宗周研究の一環であると言える。

3年目の2017年度は、劉宗周の思想を受け継ぐ門人たちの資料の分析、特に姚江書院（特にその濫觴となった人士たちの活動）に関する資料を本格的に分析した。また、劉宗周の證人社関係地点および姚江書院遺址に関する現地調査を、紹興市・餘姚市で行った。古地図等も参照しながらそれぞれの位置関係を確認し、写真撮影等を行った。また、調査の前後に資料収集を行うこともできた。これらの作業により、紹興・餘姚における劉宗周学派の活動を、より実相

に近い形で検討することが可能となった。実際の研究成果としては「何俊著『劉宗周の『人譜』 人生を完成させるための点検簿』 訳注」が『信州大学人文科学論集』(5)に掲載された(〔雑誌論文〕)。これは、劉宗周最晩年の著作である『人譜』を多角的に検討した中国人研究者の論文を日本語に翻訳するとともに、詳しい注釈をも附したものである。この研究成果により、本邦における劉宗周研究を進展させることができた。また、劉宗周の最晩年の思想を、餘姚の史孝復(前記の餘姚人士のひとり)との論争を通して分析する論考の執筆に着手した。さらに、劉宗周よりも一つ前の世代に属する紹興の学者に関する論著を、日本語と中国語〔雑誌論文〕で公表した。それにより、「明清期寧紹地区」に対する研究を推進することができた。

最終年度である2018年度は、8月に上海の復旦大学で開催された国際シンポジウムにおいて、「論劉宗周の“意”与“知”」と題する研究報告を中国語で行った〔学会発表〕。この研究報告の内容を拡充した日本語版「劉宗周に於ける意と知 - 史孝復との論争から - 」を、『東洋古典学研究』第46集で発表した〔雑誌論文〕。本項冒頭で触れたように、この学会報告と日本語論文の公表は、4年間の研究計画を総括するものであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

早坂俊廣、劉宗周に於ける意と知 - 史孝復との論争から -、東洋古典学研究、査読無、第46集、2018、pp.17-44

早坂俊廣、何俊著「劉宗周の『人譜』 人生を完成させるための点検簿」訳注、信州大学人文科学論集、査読有、第5号、2018、pp.173-196

早坂俊廣、申緒璐・劉心奕訳、沉默的周夢秀-王畿与嵯县周氏-、貴陽学院学報(社会科学版) 査読無、2017年第6期、pp.18-25

〔学会発表〕(計1件)

早坂俊廣、論劉宗周の“意”与“知”、「宋明理学国際論壇～暨上海儒学院第二届年会～」、2018年8月23日、復旦大学哲学院

〔図書〕(計1件)

小路口聡・呉震・錢明・申緒璐・伊香賀隆・播本崇史・鶴成久章・早坂俊廣・内田健太・吉田公平、研文出版、語り合う<良知>たち - 王龍溪の良知心学と講学活動 -、総421頁・附録20頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

信州大学人文学部ウェブサイト 教員ブログ

https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/hayasaka_1/blog.php

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：申緒璐

ローマ字氏名：SHEN-XULU

研究協力者氏名：劉心奕

ローマ字氏名：LIU-XINYI

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。